

プロジェクトを振り返って

I 令和2年度 福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」地区版実践発表会について

本プロジェクトでは、平成27年度のプロジェクト開始から平成29年度まで、福岡県教育センターにおいて研究開発校の発表を中心とした実践発表会を実施してきた。しかし、研究開発校の研究成果を各県立学校により広く普及することと、各県立学校で行われている取組を共有することによって、プロジェクトをさらに推進することを意図し、平成30年度から各研究実践校において地区版実践発表会を開催することとなった。地区版実践発表会では、各研究実践校における実践発表、研究授業、研究協議や大学アドバイザーによる講義等に加え、実践発表会に参加している各県立学校によるポスター発表を実施している。本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全ての地区版実践発表会をウェブ会議システム（Zoom）によって実施した。それに伴い、内容も各校の実態に応じて変更した。

※ 詳細は、本書の各研究実践校からの報告書及び「ふくおかAL通信」地区版実践発表会特集号を御覧ください。

① 門司学園高等学校【12月10日（木）実施】

1 スケジュール

- 13:30～14:00 受付（Zoomへの入室）
- 14:00～14:10 開会行事
- 14:10～14:40 実践発表
- 14:45～15:15 説明スライドに関する協議
- 15:20～15:55 全体会 グループ協議の共有（ファシリテーターが発表）、指導・助言
- 15:55～16:00 閉会行事

2 成果

(1) 実践発表

門司学園高校は通信が不安定になることが多く、いかに通信環境に負荷をかけずに発表会を行うかを考えて準備を行ってきた。その一つがオンデマンドによる実践発表であった（事前にスライドを動画に編集し、当日はその動画を参加者が視聴。）。通信環境があまり良くない学校にとっては参考になると考える。実践発表の内容は「研究の概要」「研究授業における各教科のICT活用の手立ての紹介」「オンライン授業の概要」「オンライン文化祭（11月に実施）」と、具体的に取組が紹介された。研究授業の説明は各教科担当者、オンライン文化祭は生徒会長というようにリーダーのみの発表ではなく、多くの関係者が説明を行うことができた（各教科の担当者が学習内容と手立ての関連性について具体的に説明することができ、参加者の理解が深まったのではないかと）こともオンデマンド型にしたことの利点であると考えられる。

(2) グループ協議

ブレイクアウトルームを使わず、全体会後に一旦退出→分散会会場に再度入室→分散会後に再度全体会に入室してもらった。

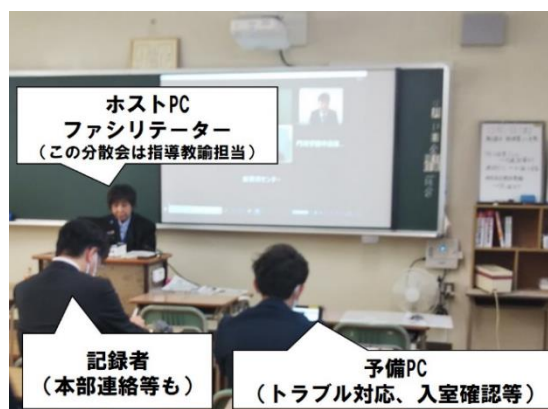
- ・全ての分散会の途絶が同時に起こることはなく、トラブル等の対応が行いやすい。
- ・運営側が自分のグループの参加者のみの管理に集中できる。
- ・多くの教員が運営に携わることができ、取組が全体化する。
- ・【短所】参加者の負担がある。接続テスト等で周知をしないと参加者が対応できない。

通信環境から、ブレイクアウトルームによる一斉のセッションはかなり不安があったこと

もあり、上記の形態で運営を行った。各グループには、ホストPC 1台+記録用PC 1台（プロジェクターで投影）の機器が設置され、ファシリテーター、記録者、設営・機器担当（本部連絡役）2名の最低4名の人員配置がなされた（実際は当日参観者などもグループ協議会場に入っていた。）。ファシリテーターは主幹教諭、指導教諭があたり、記録や機器対応は若手教員が当たるなど、それぞれが持っているスキルが生かせる役割分担がなされており、できるだけ多くの職員に経験を積ませるという姿勢、学校全体で発表会を運営するという姿勢が随所に見られた。また、協議は福岡県教育センターからの助言を受けて、説明スライドへの質疑以外のテーマも用意しており、停滞しない形で進行できた。

(3) 全体会運営（本部）

本部の設定は電子黒板、ホストPC+アナウンス用PC+予備PCの3台のPC（予備は接続テスト後、福岡県教育センターからの助言を受けて設置）。接続テストを受け、進行が開会前に参加者に対して、マイクオン/オフのタイミング、視線をカメラに合わせる方法等を丁寧にアナウンスしていた。画面上の運営側の露出は最小限で、開会前の参加者への連絡、開会行事、全体会、実践発表、閉会行事の内容や参加者への指示等はスライドで提示され、通信量の削減に役立っていた。



(4) 校内の推進体制

管理職を除くと、教諭+常勤講師が30名程度となる職員数で、規模が決して大きいというわけではない。だが、若手からベテランまで教員がそれぞれのもっている知識や技能を生かして、プロジェクトに取り組もうとする姿勢が発表会全体を通じ伝わってきた。



大山リーダーは「(本校の取組は)いろいろな先生が一人一人の長所を生かして、自分たちが足りないところを補って取り組んでいる」とおっしゃっていた。発表会もその考えに基づいて人員配置や役割分担が行われていた。コロナ禍で研究のスケジュールを変更せざるを得ない状況になってしまい、観点別評価についての研究が本年度は不十分であったとのことだが、このチームワークを発揮することで、今後、研究を充実したものにすることができると確信している。

② 中間高等学校【12月4日（金）実施】

1 スケジュール

- 13:30～13:40 開会行事、日程説明
- 13:40～14:00 実践発表
- 14:10～15:20 協議（30分を2回実施）
- 15:30～15:50 全体会
- 15:50～16:00 閉会行事



2 成果

(1) 事前連絡

- ・協議Ⅰ、協議Ⅱに関して、事前連絡で参加者全員に対し、各自が参加するグループの動画（実践授業〈外国語・理科〉）、及び各学校のポスタースライドを見ていただくよう連絡をしていた。

(2) 協議

- ・授業者が実践授業の説明を15分間行い、その後15分間の協議を行った。協議では、チャットで質問を受けるようにしており、グループによって差があったかもしれないが、質問は随時入っていた。後半になるとやや減少したため、授業者が工夫点等についての補足説明を行うなどの場面もあった。
- ・各学校からのポスター補足説明及び質疑を行った。説明1分程度、質疑を4分程度としていたが、説明時間は学校により差があった。質問については、こちらもチャットで受けていたが、学校により、質問の数にバラツキがあったかもしれない。概ね時間通り終了できた。

(3) 全体

- ・全体を通して、トラブル等はあったものの、時間通りに実施することができた。ブレイクアウトルームに対して、途中時間をアナウンスするなどしてどの部屋も同時刻に退出できるようにしていた。
- ・運営面は特に前半が大変だった印象である（トラブルの対応やブレイクアウトルームの振り分けなど）が、常に複数の職員で対応する体制がとれており、滞りなく実施できていた。
- ・ブレイクアウトルームは、各部屋に責任者、司会、PC係など3～4名を配置していたので、スムーズに進行できていたようである。

③ 須恵高等学校【12月11日（金）実施】

1 スケジュール

14:00～14:10 開会行事

14:10～15:10 実践発表

- ・研究授業報告 → 動画視聴（国語総合・生物）を予定していたが、接続テストでの配信状況が悪かったため、静止画を使用しての説明に変更
- ・ICT活用実践報告（Explain EDU、Teams、Forms、Kahoot!、Google Classroom、Classi）

15:20～15:45 説明スライドに関する協議（5グループ）

15:50～16:20 パネルディスカッション（生田教授と須恵高校生徒5名）

16:25～16:30 閉会行事

2 成果

(1) 運営面

ア 接続テスト

- ・sli.doの説明をした。そのため、発表会当日もsli.doを使った質問が出された。（zoomのチャットと違い、1週間、質問をしたり、回答したりできる。）

イ 事前連絡

- ・同じグループの説明スライドを見て当日参加していただくよう依頼→スライドの補足説明なしでグループ協議を実施（協議時間：30分）したので、協議の内容を深めることができた。
- ・グループ協議では、カメラを見て話すことやチャイムを切る等の措置をとっていただくよう依頼していたので、違和感なくスムーズにグループ協議ができた。



ウ グループ協議

- ・ギャラリービューを使い、発言がある時は挙手をお願いしたため、スムーズにグループ協議ができた。
- ・議題を統一（①自校の取組について、他校からアドバイスいただきたいこと、②他校の取組についての質問）したため、スムーズに協議を進めることができた。

(2) 内容面

ア ICTの活用

- ・ Explain EDU 等による授業動画視聴 → 生徒は Teams で意見交換や教師に質問
→ 教師は生徒の質問やつまづきやすいところを黒板で解説
- ・ Google Classroom を使用して授業解説動画視聴 → WEBテストの実施
- ・ Classi のWEBテストの活用

イ パネルディスカッションにより、学習の取組状況や意識の変容について、生徒の声を聞くことができた。

- ・ ICTを活用した授業のよさ（アダプティブ・ラーニング、資料の提示、動画視聴）
- ・ ICTを活用した授業の問題点（通信環境が悪いと授業にならない。）
- ・ ICTによる課題（通知が来なかったり、通知を見忘れていたりすると課題提出できない。）
- ・ ICTの活用による学びの変化（YouTube で自分で学べる。）

④ 太宰府高等学校【12月18日（金）実施】

1 スケジュール

- 12:00～12:30 接続テスト
- 14:00～14:40 開会式、日程説明、実践報告
- 14:50～15:20 グループ協議
- 15:25～16:30 協議内容の全体共有、講評、指導・助言、閉会行事

2 成果

この項では、同発表会の放送室（本部）で発表会の様子を見た立場から、主に運営上の特記事項について報告する。

(1) 運営面

ア 接続テスト

- ・他の研究実践校と異なり、当日午前に実施
- ・各授業者お好みのBGM付きのスライドショー（一部動画）で研究授業の様子を紹介

イ 全体会

- ①発表者の撮影と音声を拾うメインのタブレットPC
- ②参加者管理の共同ホストPC
- ③画面共有用のPowerPointを入れた共同ホストPC
- ④予備の協同ホストPC
- ⑤参加者と同じ立場でヘッドセットを使用し参加するPC（複数）



開会行事等では複数の発言者（例：司会、来賓、校長等）がいるため、①タブレットPC内臓のカメラとマイクを使用していた。ヘッドセットのマイクを使用した方が音声をクリアにできるが、マイクの付け替え等による設定変更による途絶等を回避するため不採用だったとのことであった。入念な試行錯誤により、当日の放送途絶やハウリング等の不備は皆無であった。

ウ グループ協議

- ・ブレイクアウトルームで3分割、同校職員がMC役
- ・進行方法は事前に参加者に提示
- ・職員の役割分担：

- ①MC役（ヘッドセットを使用、ハウリング防止）
- ②サポート役（不測事態対応、連絡調整）
- ③放送室（本部）等で参加者と同じ立場でチェック

例えば、参加者が発表する時、マイクオフにしたままで音声
が出力されていない場合、③の担当がメール等で②に連絡し、
②が①に伝える連絡体制が構築されていた。



分科会の進行原稿や最後のコメントまで作成され、各分科会共通した質の担保がなされていた。

(2) 内容面

理論やデータに基づきつつも、生徒への愛情や組織的な協働を併せ持った同校の実践報告、実践を包括し価値付けいただいた松尾准教授の講評、閉会式の学校代表挨拶まで熱量の高い内容であった。

⑤ 朝倉高等学校【12月16日（水）実施】

1 スケジュール

- 13:30～14:00 受付（Zoom ミーティングへ入室）
- 14:00～14:05 開会行事
- 14:05～14:10 日程説明
- 14:10～14:40 実践発表（朝倉高校）
- 14:50～15:20 グループ協議
- 15:25～15:45 全体協議
 - ・グループ協議の共有（グループの司会が発表）
 - ・ポスター発表・グループ協議に関する質疑応答
- 15:45～15:55 指導・助言
- 15:55～16:00 閉会行事
- 16:00～ 諸連絡（アンケート回答依頼等、Zoom ミーティング退室）

2 成果

(1) 実践発表

前年度までの取組を紹介し、本年度の取組とのつながりを示した。Can Do リストの作成は、どの教科でも使える技術、教科の特性に応じた技術をリストアップし、教員が必要とするICT活用技術の構造化、技術の共有、浸透を可能にした。対話・討論を含んだ授業を実践した際の評価方法をリストアップした。各教科代表からなる校内のプロジェクト推進委員が中心となり、教科会議、職員研修の機会を利用して、組織的な取組となるように工夫した。ICT環境が整備されてもICT機器の使いづらさがボトルネックとなってICT機器の活用・普及を妨げているということが続く協議の柱とした。

(2) グループ協議

事前に司会（5名）を立て、協議の柱を示し、当日の協議運営の準備をお願いした。実践発表からグループ協議まで貫く柱を設定したことから、グループ協議が円滑に進んだ。

グループ協議の内容をグループの司会が発表し、全体の司会が整理をして協議内容を会議の参加者全体で共有した。当日の協議の柱は、会議のテーマ「未来へつなげるICT活用方法」をさらに絞り込み、「ICT機器の使いづらさの共有とその解決に向けての取組」とした。各グループでは協議の柱に沿った議論が行われ、ICT環境の整備、ICT機器の活用をはじめ、組織的な取組を進めるための方策についても話が及んだ。

(3) 全体会運営（本部）

事前に行った打合せ、接続テストが生かされ、課題をクリアして発表会を迎えることができたので、ICT機器の管理・運用にほとんど問題が生じなかった。スライド資料も事前打合せで視覚効果を取り除いたデザインに変更したので、視聴者にストレスを与えず見やすいものになった。主だった問題は、別室の司会者と挨拶者（画面に原稿貼付）との間の意思疎通が妨げられた、パワーポイント資料の画面共有時に短時間画面が固まる、タブレットPC

を共有する司会者と挨拶者の交代に時間がかかった、ということだった。

(4) 校内の推進体制

校内のプロジェクトチームが教科の代表となっており、教科会を介して校内に取組を広げる体制を整えている。実践発表会は平常の授業日程と並行で行い、限られた職員で発表会を運営していた。

II 令和2年度福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」研究協力校オンライン発表会について

本プロジェクトでは、各研究実践校による研究成果の発表が取組の中心となってきたが、研究実践校とともにプロジェクトに参加してきた、研究協力校の研究成果を共有する場が設けられていなかった（これまでは地区版実践発表会等の場において実践発表等の機会が設けられていた）。そこで、本年度は、研究協力校の研究成果の普及が図られるよう、研究内容の発表の場を設定した。地区版実践発表会と同様、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ウェブ会議システム（Zoom）によって実施した。



【概要】

開会行事では、福岡県教育庁教育振興部高校教育課の中島敦雄主任指導主事から、学校が持つ役割を最大限に果たすために、対面による指導とオンラインによる学習の最適な組合せによって、全ての生徒の可能性を引き出す学びを支援することの重要性について話があった。

実践発表では、参加者が事前に、前半・後半から1校ずつ視聴する実践発表を選択し、発表を視聴する形態をとった。研究協力校の発表テーマは以下のとおりである。

〈研究協力校の実践発表テーマ一覧〉

	実践発表校	実践発表テーマ
前半	A 北筑高等学校	「ICTを利用した教科等横断型授業と評価」
	B 糸島高等学校	「YouTubeを活用した授業の実践について」
	C 輝翔館中等教育学校	「これまでの協同学習等の取組とオンライン授業の実践について」
後半	D 小倉東高等学校	「ルーブリックとパフォーマンス課題の活用を通じた授業改善」
	E 光陵高等学校	「主体的に学習に取り組む態度および、思考力、判断力を育成するための指導」
	F 直方高等学校	「表現力を高める指導方法の改善」～読解力を育成する授業展開の工夫～

実践発表後、「新たな学びプロジェクト」が始まった平成27年度以来、アドバイザーとして指導していただいている福岡教育大学の生田淳一教授による講義が行われた。「ICTを活用した『新たな学び』の実現に向けて、学校の教育目標を共有し、各学校の生徒・環境に合った取組を実現するために、教職員全員で挑戦・成長することが大事であり、このような授業改善に取り組むと、発問が磨かれ、カリキュラム・マネジメントが実現する」とお話しいただいた。

閉会行事の福岡県教育センター香野幹治教育経営部長の「ICTは使用するのではなく、『活用』するもの」という言葉は、授業におけるICTとの関わりを見つめ直すよききっかけとなったと考える。

発表会のアンケートでは、実践発表、生田教授の講義、全体会の満足度は全て95%程度の非常に高い数値を示しており、発表会実施の目的は十分達成できたものとする。

【アンケート結果】（福岡県教育センターHP及びAL通信40号に掲載していない分を記載）

① ICTの具体的な活用場面や活用機器、活用方法

学習形態	学習場面	具体例	(ICT使用の)効果	学習上期待される効果
一斉学習	教材の提示	教科書の本文や補助教材、問題集、ワークシートやその解答等	○本文データにタッチペンで書き込みを行いながら学習を進める。	○興味や関心を高める。 ○見通しを持つ。 ○知識・技能を習得する。 ○知識や技能を概念化する。
		プレゼンテーションソフト等で作成した教材等	○板書内容をスライドで提示する。 ○タブレット型端末と電子黒板を無線接続し、教師は教室を移動しながら説明する。	
		実物や映像等	○書画カメラにより実技内容等をリアルタイムで投影する。 ○細かい図や実験の動画等を投影する。	
	デジタル教科書の使用	○授業支援ソフトで作成したプリントと連動させて授業を進める。 ○英語の発音練習を行う。 ○児童生徒が見やすい文字の大きさに設定して学習する（障がいのある生徒等）。	○学習活動の焦点化 ○学習の効率化（板書時間の短縮） ○協働学習の時間の確保 ○授業の準備時間の短縮 ○学習内容の視覚化 ○個への配慮の充実 ○特性に応じた情報入手	
個別学習	調べ学習、制作等	○情報収集や情報の整理・分析を行う。 ○スライド資料や動画を作成する。 ○グラフを実際に動かして平行移動の意味を考える。 ○意見を共有する。 ○問題を解いたり考察したりする。	○調査活動の効率化 ○確かな情報収集 ○制作物の自在な保存・共有 ○制作過程の振り返り ○活発な意見交流 ○生徒の学習状況の把握 ○各自のペースでの学習 ○学習への継続的な取組	○自分と結び付ける。 ○粘り強く取り組む。 ○振り返って次へつなげる。 ○多様な情報を収集する。 ○先哲の考え方を手掛かりとする。 ○思考して問い続ける。 ○知識・技能を習得する。 ○知識・技能を活用する。
	家庭学習等	○授業に関する問題等を作成し、ファイル共有ソフトにあげる。 ○実習の手順等をスマートフォン等で確認させる。 ○オンライン授業動画を配信する。 ○課題等（資格試験に向けた補修内容）を配信する。 ○復習教材として授業の短縮動画や模試の解説動画等をウェブ上にあげる。 ○反転学習用の動画をあげる。		

協働学習	発表	<ul style="list-style-type: none"> ○作成したレポートをスクリーンに投影する。 ○生徒が作ったスライド資料を動画変換器でスクリーンに映す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○意見等の整理のしやすさ ○新たな表現や考えへの気づき ○多角的な視点への気づき 	<ul style="list-style-type: none"> ○思考を表現に置き換える。 ○多様な情報を収集・整理する。 ○多様な手段で説明する。 ○自分の考えを形成する。
	意見の共有・協働作業	<ul style="list-style-type: none"> ○ブレイクアウトルームを用いて意見を共有する。 ○録画した活動を見て改善策について話し合う。 ○生徒の回答を電子黒板に写し、意見を共有したり添削したりする。 ○完成した作品を撮影して電子黒板に提示し発表する。 ○コンセンサスゲームで対話の訓練をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○情報の視覚的な共有 ○議論の深化 ○意見整理の円滑化 ○異なる意見や文化への理解 	<ul style="list-style-type: none"> ○互いの考えを比較する。 ○共に考えを創り上げる。 ○協働して課題解決する。 ○自分の思いや考えと結び付ける。 ○自分の考えを形成する。 ○新たなものを創り上げる。
	外部との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ○海外の大学や他校と交流する。 ○外部機関の方々との意見交換や打合せを行う。 		
その他	アンケートの配信・集約	<ul style="list-style-type: none"> ○学習時間調査、アンケートの入力と集計を行う。 ○授業アンケートを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○事務処理の効率化 	
		<ul style="list-style-type: none"> ○教員間で教材を共有する。 ○保護者と面談を行う。 		

② ICT活用上の課題の解決のための有効な取組

<p>○研修会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内研修会の充実を図る。（機器の使用、校内外の実践例の紹介、外部講師の招聘、情報提供） ・ICTに長けた教員に校内研修の講師を務めてもらい、ICTのスキルアップを図る。 ・様々なオンライン学習支援ツール・サービス、及びそれらのサービスの形態に合わせた活用法の検討を組織的に行い、校内研修等で共有していく。 ・チームティーチングでのお互いのスキルアップ。 ・校内ICTを活用した研究授業を実施し、割り振って参観する。 ・授業アンケートの評価の高い先生の授業を参観し、良い授業を教員全体で共有して、自己の改善に活かす。
--

- ・教員間でICTの利用に関して情報交換をする場の設定やICTの利用について外部講師の講義により、教員の知識・技術を高めることができる。
- ・学校間の交流によって、先進的に取り組んでいる実践例を知る機会をつくる。

○教材開発

- ・毎年担当者間でノルマと分担を決め、複数年を通じた作成を目指す。
- ・各教科において、ICTを活用した教材の作成及び共有する。
- ・教材研究をしっかりと行い、ICTを使用するか十分に精査し、単元の内容に合わせた活用方法を考える一方で、ICTを利用しない単元を設定することでメリハリをつける。
- ・ICTを使うことが目的ではなく、あくまでも「深い学び」に誘うツールの一つとして位置付ける。

○評価

- ・授業の目的に立ち返り、「ICTを使うこと」が目的化しないよう留意する。
- ・既実践されているものを参考にしながら学校独自の評価規準を作成する。
- ・評価場面や評価方法に関するモデル授業を公開する。学校規模や生徒の実情等に合わせ複数のパターンがあるとより効果的になる。

各校から回答された上記の取組に加え、福岡県教育センターから三つ提案する。

- 1 新学習指導要領が求める「未知の状況にも対応できる“思考力・判断力・表現力等”の育成」に向け、授業のロールモデルを作成する。

課題の提示 → 情報収集 → 情報処理（個別学習・思考） → 情報発信（協働学習） → グループのまとめ（合意形成・思考の深化） → 情報発信（発表・プレゼンテーション） → 評価（感想・意見交換） → 再検討

- 2 福岡県教育センター指導主事による研修

学校のインターネット環境やICT環境の実態に応じて、派遣コンサルタントやどこでもセミナーを活用することで、限られた環境下においてもICT活用や深い学びに向けての研修や提案が可能である。

- 3 福岡県教育センター成果物の活用

ICT活用に関して、平成27・28年度作成の「ICTを活用したアクティブ・ラーニング」のほか、電子黒板・タブレットといったICT機器の基本的な使い方を示した活用の手引をホームページで公開している。あわせて、福岡県教育センターHPの、「ふくおか学びの応援サイト」に生徒や教員に向けたコンテンツを公開しているので、それらの活用を図る。